

# Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	アレシ・アダモーヴィチとドストエフスキー：独ソ戦争と古典文学の対話
Author(s)	越野, 剛
Journal	上智ヨーロッパ研究
Issue Date	2023-03-07
Type	Departmental Bulletin Paper
TextVersion	publisher
URL	<a href="https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20230316003">https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20230316003</a>
Rights	



上智大学  
SOPHIA UNIVERSITY

# アレシ・アダモヴィチとドストエフスキー： 独ソ戦争と古典文学の対話

越野 剛

Ales Adamovich and Dostoevsky:  
A Dialogue between The Great Patriotic War and Classic Literature

Go Koshino

**Abstract** This paper analyzes quotations and motifs from Dostoevsky's novels in the war literature, written by the Belarusian Soviet writer Ales Adamovich. In the course of his field and documentary research on the war crimes committed by Nazi Germany in rural Belarus during World War II, Adamovich realized that Dostoevsky's works provide important clues for considering contemporary war issues even though most of his major novels do not deal directly with the theme of war. Dostoevsky's works have the power to arouse the contemporary reader's actual interests rather than to "predict" 20<sup>th</sup> century war atrocities. Two of Adamovich's works are discussed here. *I am from the Fiery Village (Out of Fire)*, a literary documentary that collects testimonies from survivors of the massacre, and *The Chasteners*, a novel that depicts the massacre from the perspective of the perpetrators. Many testimonies in *I am from the Fiery Village* recall the motif of the unreasonable slaying of children and the grief of their parents in *The Brothers Karamazov*. The self-justification of the collaborators with Nazi-Germany in *The Chasteners* clearly underlies Raskolnikov's philosophy of murder in *Crime and Punishment*, which seeks to measure the value of human life by calculation.

---

## はじめに

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって以降、その政治的な背景だけでなく、ロシア文化そのものが暴力的なナショナリズムを内包しているのではな

いかという議論が見られる。戦争体験を通じて平和主義に至ったトルストイに比べると、『作家の日記』で好戦的な西欧批判を繰り返していたドストエフスキーの評判は芳しくない<sup>1</sup>。しかし、その小説は総力戦と大量死を体験した20世紀以後の現代世界において一種のリアリティをもって読まれるようになっており、言語文化の境界を越えて大きな影響を及ぼしていることは否定できない。本論ではベラルーシの戦争文学の作家として知られるアレシ・アダモーヴィチの著作の中で、ナチ・ドイツが農村地域で行った民間人の虐殺という戦争犯罪を扱った作品を取り上げ、その中に見られるドストエフスキー的な主題について分析を試みる。記録文学である『炎の村から来た私』（1975年）と戦争犯罪を加害者の視点で描いた小説『懲罰隊』（1981年）の二つが主な題材である。やはりアダモーヴィチによる小説『ハティニ物語』と合わせて、いずれもエレム・クリモフ監督のよく知られた戦争映画『行け、そして見よ Иди и смотри（邦題：炎 628）』（1985年）の原作となった作品である<sup>2</sup>。

アレシ・アダモーヴィチ（1927-1994年）は、ソ連時代のベラルーシを代表する作家としてよく知られている。ロシア語とベラルーシ語で執筆し、戦争を題材とした作品を多く書いている。独ソ戦中には十六歳でパルチザン部隊に加わり、その体験をもとにしたパルチザン二部作『屋根の下の戦争 Война под крышами』（1960年）、『息子たちは戦闘に出かける Сыновья уходят в бой』（1963年）で作家としてデビューした。「60年代人」のリベラルな知識人という意識をもち、1965-66年のダニエル＝シニャフスキー裁判では批判文書に署名することを拒絶する気骨を示し、結果として当時勤務していたモスクワ国立大学の講師の職を追われた（Шапран 2002）。ヤンカ・ブルーリ、ウラジーミル・カレスニクと共同でナチ・ドイツのベラルーシ農村での戦争犯罪を取材した『私は炎の村から来た』（1975年）、ロシアの作家ダニイル・グラニンとの共作でレニングラード包囲を扱った『封鎖の書 Блокадная книга』（1977-82年）<sup>3</sup>という二つのドキュメンタリー文学の仕事は高く評価されている。複数の生存者の語りの声を記録して編集するというオーラルヒストリーを彷彿させるその手法は、後のスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの創作に大きな影響を与えたことも知られている。80年代の「新冷戦期」には核兵器の使用に反対する発言を積極的に行い、小説『最後の牧歌 Последняя пастораль』（1987年）で核戦争による人類の滅亡を描いた。ソ連末期の人民代議員選挙（1989年）に出馬して当選し、ベラルーシにおけるチェルノブイリ原発事故の汚染状況を訴えた。被災者支援活動のため1990年に来日したこ

ともある（アダモーヴィチ 1990；越野 2003）。アダモーヴィチはパルチザン二部作をはじめとする作品の映画化にも積極的に関わり、晩年はモスクワの映画研究所の所長も務めた<sup>4</sup>。

## 1. アダモーヴィチとドストエフスキー

アダモーヴィチは作家として活躍する一方で、文学研究者でもあり、ベラルーシ文学、ロシア文学に関する論考を多数発表している。その中でもドストエフスキーはアダモーヴィチが愛読した作家の一人だが、自身の創作活動の核心と交差するかたちで関心が深まるのは、1970年代前半に同僚の作家と共同で戦争体験についての聞き取り調査を行っていた時期だった。ベラルーシの農村でナチ・ドイツの集団虐殺を生き残った人々を尋ねる旅では、「同じ車にドストエフスキーが乗っていて、彼のために録音や写真を撮ることができたなら」という思いが浮かんだという（Адамович, 1983b, p. 365）。900日にわたるレニングラード包囲で生死の境をさまよった人々に取材したときには、極限状況におかれた人間の精神の崇高さと深淵の両方を知り抜いたような語りを聞いて、あたかも彼らが「ドストエフスキーを読みこんでいる」かのような感覚にとらわれた。「ドストエフスキーという言葉で示される文学はいつも先の方で待ちかまえて」おり、「そのことについては彼がすでに語っている」ことがいつも明らかになる（Адамович, 1983b, pp. 367-368）<sup>5</sup>。19世紀の過去に書かれた文学が、20世紀の戦争という状況の中でも古びることはないと言っているわけではない。むしろ100年後の未来の人間の体験を介することで、ドストエフスキーの中にそれまで予想もされていなかった新しい意味が見出される。アダモーヴィチの文学における古典との対話はそのように理解すべきだろう。

ドストエフスキーは『悪霊』などの後期作品で社会主義や革命思想を戯画化して描いたこともあり、ソ連では禁止されなかったとはいえ、必ずしも好意的には評価されていなかった。その流れが変わったのは1960年代になってからである。ユーリイ・カリーヤキン（1930-2011年）はスターリニズム批判と結びついた社会評論的なドストエフスキー批評を展開した。一方でヴァディム・コージノフ（1930-2001年）は窮境にあったバフチンを助け、『ドストエフスキーの詩学』の出版（1963年）など、バフチンを介した作家の再評価に大いに寄与した。カリーヤキンは「60年代人」のリベラルな立場を代表し、コー

ジノフは後にロシア・ナショナリズム的な立場からのドストエフスキー論に展開していく傾向があった (Dmitriev, 2021)。1981年にはリベラルな文芸誌『ノーヴィ・ミール』(10月号)と民族派寄りの『われらの同時代人』(11月号)で、それぞれ作家生誕160周年記念の特集が編まれている。アダモーフィチは前者の方に「ドストエフスキー後のドストエフスキー」という論考を寄稿した。

アダモーフィチのドストエフスキー論は、ユーリイ・カリーキンの「算術 арифметика」についての議論を敷衍している (Карякин, 1967)。この言葉は『罪と罰』に由来する。金貸しの老婆を殺害するという計画がラスコーリニコフの頭に初めて浮かんだ直後にふと訪れた酒場で、たったいま自分の思いついたのと同じことを見知らぬ学生が語っているのを耳にする。何の役にも立たないどころか、社会にとって有害でしかない強欲な老人から大金を奪い、それを公正な事業に用いるならば多くの貧しく虐げられた人々を救うことにもなるだろう。「一人の死と交換に百人の命、こいつは算術ってやつだ」(第1部6章)<sup>6</sup>と学生は結論づける。人間の生命の価値を数量的に計算するという「算術的ヒューマニズム」の思想は、『悪霊』においてグロテスクに拡大される。理想的な世界を構築するためには「一億人の首」を犠牲にすることも許されるかどうかという議論において、陰謀家ピョートル・ヴェルホヴェンスキーは言い放つ。「のんびり紙上の空想にふけているうちに、専制政治が百年かそらで一億どころか、五億人の首を滅ぼすとしたら、そんな一億など恐れることはありません」(第2部7章2節)。アダモーフィチが言うように、肥大化した「算術」の理屈はナチズムの暴力の理論と実践につながっている (Адамович, 1983b, pp. 355-256)。「算術」という言葉はラスコーリニコフが発したわけではないという点も示唆的である。それは犯罪を正当化する主人公の論理が、同じ時代の青年たちの間に汚染された空気のように蔓延していたことを示す。同じ発想は時代を越えて、ラスコーリニコフが想定する選ばれた天才だけではなく、凡庸な人間においても通俗化されたかたちで無数に反復されるだろう。

## II. 民間人の虐殺に対する関心

アダモーフィチのデビュー作『屋根の下の戦争』はドイツ軍占領下の町で暮らす主人公とその家族や隣人たちを描き、続編の『息子たちは戦闘に出かける』では少年と家族は森の中のパルチザンの部隊に合流する。いずれも作

家の戦時中の体験をもとにした自伝的な作品であり、とりわけ前者は子供の眼差しで見た大人の世界が異化の効果を伴って描かれており、トルストイの初期の創作を彷彿させる。一方で、アダモーヴィチは60年代の終わりごろから、戦時中の民間人の被害やドイツによる戦争犯罪を熱心に調査するようになる。前述したように、その過程でドストエフスキーへの関心が創作と結びつくようになる。ちょうどシニャフスキー＝ダニエル裁判に関連してモスクワ国立大学の職を追われて、ベラルーシに戻っていた時期でもあった。

ナチ・ドイツによって3年近く支配された戦時中のベラルーシでは、パルチザンの抵抗運動が活発化したが、その支援を行っているのではないかと疑われた数百・数千という農村が襲撃され、多くの民間人が虐殺された。そのうちのひとつ、首都ミンスクから北に50キロほどに位置するハティニ村は、1943年3月22日に武装親衛隊と警察補助大隊の襲撃を受けた。149人の住民（その内の75人は16歳以下の子供）が火をつけられた建物と一緒に焼かれ、あるいは銃殺された。戦後しばらくして1960年代後半に村の跡地に大規模なメモリアルを設置することが決まり、1969年に完成した。このときからハティニの名前はベラルーシの戦争被害を追悼する空間として記憶されるようになった。アダモーヴィチはちょうどこの期間にドキュメンタリー映画『ハティニ、5キロメートル』（1968年）の脚本を担当している。この映画ではハティニ虐殺の生存者ヨシフ・カミンスキーだけでなく、同じような被害を受けた他の農村の証言者も登場する。その後、1970年から73年にかけてアダモーヴィチはベラルーシの作家カレスニクとブリイリと三人で、当時はまだ貴重だったテープレコーダーを持ってベラルーシの農村を回り、生存者の証言を集めてまわった。

その成果としてまず小説『ハティニ物語 Хатынская повесть』（1971年）が書かれた。1969年に完成したハティニのメモリアルに元パルチザン部隊の参加者たちが招待される。そのうちの一人で盲目のフロリアンはハティニに向かうバスの中で、少年兵としてパルチザンに加わった戦時中の記憶を思い出す。主人公の意識が現在と現在を行き来する中で、とある村で住民が納屋に集められて焼き殺される場面を目撃したという辛い体験だけは決して直接に描かれることがなく、代わりにアダモーヴィチたちが記録した実際の生存者の語り小説の中に挿入されている<sup>7</sup>。フィクションによる表現の限界が、ドキュメンタリーで補われるのだ。そうした証言者の生きた声の集大成となったのが、ソ連における記録文学の金字塔ともいえる『炎の村から来た私 Яз

вогненной вёски』(1975年)である<sup>8</sup>。書籍内にはインタビューの際に撮られた多数の写真が掲載されており、さらにはソノシートが付録で添えられ、いくつかの証言は実際に耳で聴くこともできるようになっており、証言者の生きた姿と声を記録しようとする強い意図が感じられる。ミハイル・ダシュク監督によって、証言者の語りを記録した何本かの短編映画(1975-78年)も撮られた。

### Ⅲ. 新しい子供たちと『カラマーゾフの兄弟』

『炎の村から来た私』の「新しい子供たち Новыя дзеці」と題された章(Адамовіч et al, 1975, pp. 311-331)は、子供を殺された親たち、とりわけ母親の語りに焦点が合わされている。ミンスク州ハラジシチャ村のプラスコウヤ・アルロウスカヤは、9か月の幼児を布でくるんで逃げ出す途中に転んで圧死させてしまう。チルヴォーナヤ・スタロンカ村のナゼヤ・ニャグリユイは四人の子供を目の前で殺される。ヴァリーキヤ・プルスイ村のマリヤ・コートは、射殺された9歳と17歳の娘の遺体を燃える家から運び出そうと力を尽くした。

「新しい子供たち」というタイトルは、子供たちを殺されて生き残った親のもとで、戦争が終わった後に新しく産まれた子供たちを指している。そうした人たちの証言では、「六人がいたし、今も六人いるんだ」(Адамовіч et al, pp. 312) というように、現在の幸福を過去の喪失と対比させる語りにしばしば出会うという。戦時中の出来事についてのインタビューであっても、語り手は今の自分の生活について言及しないではいられない。アダモヴィチたちはここでドストエフスキーを引用する。旧約聖書のヨブ記の主人公は、理不尽な試練によってどれほど財産を奪われ、家族が次々に死を迎えても、神への信仰だけは失わない。悪魔の試練に打ち勝ったヨブは、失った財産を取り戻し、新しい家族をもうける。『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老は「かつての子供たちがいないというのに、新しい子供たちを愛することがどうしてできるのだろうか」と聖書の記述に疑問を抱きつつも、「だがそれはできる。できるのだ。昔の悲しみは、人間の生の偉大なる神秘によって、静かな感動の喜びに少しずつ変わっていく」(Адамовіч et al, pp. 312-313、『カラマーゾフの兄弟』第2部6編2章)と確信する。

「新しい子供たち」の章では、ゾシマ長老の言葉に対比させるかのように、「ベラルーシのドストエフスキー」と呼ばれることもある作家クジマ・チョールヌイ(1900-44年)の作品がさらに引用されている。第二次世界大戦中に書



かれた小説『偉大な日（復活祭）Вялікі дзень』（1943-44年）のある場面では、ドイツ兵に子供を無残に殺された父親が、ヨブ記の「新しい子」についての記述に反発する。「子供がもうひとりできるとしても、それは苦しんだあの子ではない。この苦しみは永遠にそのまま残るのだ。苦しみはすでにあったことであり、だれもそれをもう無かったことにはできない」（Адамовіч et al, pp. 313）<sup>9</sup>。『カラマーゾフの兄弟』では、ゾシマ長老のもとを訪れた農婦がわが子の死を受け容れられない苦しみを打ち明け（第1部2編3章）、病床で死の近い息子から代わりの新しい子供を持つように言われた貧しいスネギリョフ大尉は、「別の子なんていらぬ」と叫ぶ（第4部10編7章）。何の罪もない子供が受けた理不尽な苦しみを神議論の秤にかけて神に反逆するイヴァン・カラマーゾフは、『偉大な日』の子を殺された父親と共に、ゾシマ長老の言葉とは抗いながらもある種の対話的な関係にある。不条理に子供の命を奪われた親の悲嘆が決して失われない一方で、そのことによって新しく授けられた子供の愛おしさが損なわれるわけでもない。過去を生きた人間と現在を生きる人間の価値を何らかの「算術」で結びつけようとする身振りは何も解決はしないだろう。戦後に新しい家族を得ることのできた20世紀のヨブたちは、単に子供を取り戻したというのではなく、アダモヴィチたちの表現を借りれば、「生命に生命を戻す」（Адамовіч et al, pp. 313）ことを実践したのだ。

#### IV. 対敵協力者の心理と『罪と罰』

『ハティニ物語』が少年バルチザン兵の目撃者の視点、『炎の村から来た私』が被害者の視点で記述がなされるとしたら、『懲罰隊 Каратели』は加害者の視点と内面の心理を克明に描き出している<sup>10</sup>。オスカル・ディルレヴァンガー（1895-1945年）の悪名高い武装親衛隊部隊によって、およそ1800人の住民が虐殺された1942年6月15日のモギリョフ州ボルキ村とその周辺の集落が舞台となる。ディルレヴァンガー自身をはじめとするドイツ人の将兵だけでなく、ウクライナ人、ベラルーシ人、ロシア人の対独協力者（コラボレーター）が多数登場する。ほとんどの登場人物には実在のモデルがあり、裁判記録や当事者の証言が引用されているため、ドキュメンタリー的な性格もあるが、虐殺の実行者たちの内面の心理や具体的な言動は、文学的な想像力によって肉付けされている。『懲罰隊』の登場人物で特に注目に値するのが、ディルレヴァンガー部隊のコラボレーターでは最も高い地位にあるロスチラフ・ムラ



ヴィヨフである。彼の登場する場面では、しばしばドストエフスキー、とりわけ『罪と罰』のモチーフが意識的に用いられている。

## 1. 共同体からの疎外

ムラヴィヨフは赤軍の将校としてドイツ軍と勇敢に戦うが、負傷して不本意ながらも捕虜になってしまう。ソ連軍の将校はどんな窮地に落ちようともドイツ軍の捕虜となることは厳しく禁じられていた。小隊の指揮官だったムラヴィヨフにとってそれは軍人の名誉の失墜であることはもちろん、もし万が一にも生き残って祖国に戻ることができたとしても裏切者扱いされる運命を意味した。興味深いことに、越えてはならないはずの一線を心ならずも踏み越えてしまったという状況が、ムラヴィヨフの意識の内では何よりもまず第一に、人々の親密な共同体からの追放として想像されている。「彼にとって必要な人たちが残っているあの世界から、永遠に投げ出されてしまった」(Адамович, 1983a, p.125)。夢の中では過去の時間にさかのぼって母や妻と対話することもできるが、目が覚めるとナチ・ドイツの協力者という現状の認識からは逃れようもなく、家族との生きたつながりは永遠に失われてしまっている。

ムラヴィヨフの疎外の感覚の描写は明らかに『罪と罰』の主人公の体験が下書きになっている。ラスコーリニコフも殺人という一線を越えてしまった後で、同じように社会的な疎外の感覚を味わうことになる。犯行の直後にたまたま別件で呼び出された警察の署内で、彼は相手が警官だろうと血を分けた兄弟姉妹だろうと、これからは腹を割って話すどころか、こちらから声をかけることもできないのだという奇妙な感覚に捉えられる(第2部1章)。人を殺したという意識が断崖のように他者との交通を遮断し、母や妹ドゥーニャ、友人ラズミーヒンなど親身に相手してくれる人々に対しても決して打ち解けることができない。警察署を出た後、施してもらった銀貨を橋の上からネヴァ川に投げ込むと、ラスコーリニコフは「その瞬間、あらゆる人間とあらゆる物事から、自分というものをみずからハサミで切り離れたかのように感じた。」(第2部2章)。『罪と罰』の殺人に比べると、ムラヴィヨフの罪はさほど重いとは見えないが、過酷な虜囚体験を経て、対敵協力者として戦争犯罪に加担していく道筋は継ぎ目なく繋がっている。

## 2. カニバリズム

1941年の開戦直後に大量のソ連軍兵士が捕虜となり、その多くがドイツ軍の収容所で命を落としたことが知られている。捕虜収容所といっても、収容する建物や雨露を避ける屋根すらなく、吹きさらしの野原に鉄条網を張り巡らして、捕虜となった兵士を無理に詰め込んだような場所も多かった。十分な食料が配給されず、冬季にも寒さの備えはなく、膨大な数の餓死者・凍死者を出した<sup>11</sup>。『懲罰隊』のムラヴィヨフも、ペラルーシのボブルイスクに設置された悪名高い捕虜収容所「ドゥラーク 131」に入り、餓死寸前の極限状態に追いやられる。放置された山積みの死体からチフスが蔓延すると同時に、人間的な相貌と規範を失った「ネズミ人 люди-крысы」が跋扈する。彼らがこっそりと鍋で煮た肉の切れはしを見つけたムラヴィヨフは夢中でそれを咀嚼して呑みこむが、後にそれが人肉だったことがわかって嘔吐する（Адамович, 1983a, 126-127）。

ドストエフスキーの作品では具体的な人肉食の場面が描かれるわけではないが、神の信仰を失った人間が行きつく先の末路のふるまいとして、カニバリズムは象徴的に言及されている。例えば『罪と罰』のエピローグでラスコーリニコフが見る悪夢では、人類が謎の旋毛虫に感染した結果、だれもが自分がいちばん正しく、他の人間はみな間違っていると思うこむようになり、意見が一致せず相争い、軍隊も内輪もめを起こして、殺し合いを始め、しまいには「互いに噛みつき、食らい合う」までに至ったという<sup>12</sup>。旋毛虫の悪夢で描かれるカニバリズムは、規範を踏み越える権利を持つ非凡人というラスコーリニコフの理念をグロテスクに戯画化したものであり、主人公をソーニャの前での悔い改めに導くステップのひとつになっている。一方でラスコーリニコフとは対照的に、収容所という悪夢のような現実でカニバリズムを実体験したムラヴィヨフは、飢えの苦痛に耐えることができず、ナチ・ドイツ軍の協力者として働くことを承諾してしまう。ここでのカニバリズムはドストエフスキーにおけるような規範からの逸脱の頂点というよりは、むしろ規範を踏み外した人間がなしうる悪のまだ入り口にすぎないともいえる。

## 3. 算術とチンギスハン

ムラヴィヨフは捕虜となり、さらにはドイツ軍のコラボレーターとなるに及んで、ソ連の市民および軍人としてのモラルの拠り所となっていた世界から切り離される。「捕虜になったこと、これほど無力で下手くそな戦争につい

て彼の責任を問うことのできた世界は、遠ざかり、東の方にどんどん退いていった」(Адамович, 1983a, p. 126)。しかしそれでも彼は「どんなところにいようとも人間としてあり続けることができる」(Адамович, 1983a, p. 128)という父の座右の銘を自分の境遇に強引に当てはめ、戦争犯罪に加担する自分のふるまいを道徳的に正当化しようと試みる。その際に彼が依拠する理屈は、一人の老婆の生命を犠牲にすることで多数の人間に幸福をもたらすというラスコーリニコフの「算術」によく似ている。ムラヴィヨフの理解するところでは、戦争でのソ連の敗北はすでに決定しており、無駄な抵抗によって死者の数を増やすよりは、むしろナチ・ドイツにとって尊敬に値する軍人としてふるまうことによって、結果的には多くの人間を救うことができるはずだ。そのためにはソ連のパルチザンを支援しているベラルーシの農村の住民を殺害することもやむを得ない。「連中と一緒に何千という単位の数人を殺したとしても、その後で我々は数百万人を救うことになる」(Адамович, 1983a, p. 132)

ここで興味深いのは、ナチ親衛隊指導者のヒムラーがディルレヴァンガーに贈与した『チングスハン』という書物への言及だ(Адамович, 1983a, pp. 134, 156)。明示されてはいないが、ロシアからドイツに亡命した作家ミハエル・プラウディンが書いた著作と思われる<sup>13</sup>。ヒムラーはプラウディンの著作を高く評価して、1938年の合本版をクリスマスプレゼントとして親衛隊の幹部や高級将校に配布している(Breitman, 1990, pp. 339-340)。『懲罰隊』のディルレヴァンガーの手元にあったのもこの本だろう。ヒムラーがプラウディンの著作を評価したのはチングスハンの殲滅戦術がナチ・ドイツ軍の東部戦線での作戦と合致するところが多かったからだと考えられる<sup>14</sup>。一方でムラヴィヨフは『チングスハン』からそれとはまったく異なる教訓を引き出す。モンゴル軍に抵抗することを諦めて、臣従することを選んだルーシの諸侯は決して裏切者だったわけではなく、結果的には無駄な流血を避けて多くの人命を救ったという(Адамович, 1983a, p. 134)。これもやはりラスコーリニコフの「算術」に通じる理屈であり、ドイツ軍のコラボレーターであるムラヴィヨフの立場に都合よく重ね合わせた解釈でもある。

#### 4. 聖書の朗読

『懲罰隊』とドストエフスキーの創作が交わるひとつのモチーフは聖書の引用である。人間の生命を算術的に操作するラスコーリニコフの思想に対比されているのが、信仰に裏打ちされたソーニャの言葉と身振りである。とりわ

け彼女がヨハネの福音書を朗読する場面には、その後のラスコーリニコフの「復活」を予徴する象徴性を読み取ることができる。他方で、懲罰隊の指揮官ディルレヴァンガーは、奇妙なことにスターシャというポーランド出身のユダヤ人女性を愛人にして、身の回りの世話をさせている。スターシャの父の靴職人ラザロは、なかば人質としてやはりディルレヴァンガーの庇護下におかれている。ムラヴィヨフは武装親衛隊の指揮官のもとにユダヤ人女性が囲われていることに驚くが、『罪と罰』のラスコーリニコフが絶対的な疎外感の中でソーニャに惹かれていくように、スターシャの姿から目をそらすことができない。ディルレヴァンガーも危険な関係から足を洗うため、ユダヤの愛人をムラヴィヨフと「結婚」させようとする。

ディルレヴァンガーのもとで幹部将校の晩餐会に招かれたムラヴィヨフはニーチェ思想に傾倒するツィンマーマンと対話する。親衛隊将校がたまたまヨハネ福音書のラザロ復活のくだりを朗読すると、そこにコーヒーを配りにスターシャが現れる。ちょうどイエスが遺体にむかって「ラザロよ、出てきなさい」と呼びかける場面だ（Адамович, 1983a, p. 140）。この台詞はディルレヴァンガーの庇護下にあるスターシャと父親ラザロの関係を暴露する意味を持つとともに、『罪と罰』でソーニャが同じ個所を朗読する場面ではラスコーリニコフの復活の予徴となっていた。スターシャはこの台詞を受動的に受け入れるだけだが、それに続いてディルレヴァンガーは彼女に旧約聖書の『ユディト記』を朗読するように命じる（Адамович, 1983a, p. 141）。アッシリアの將軍ホロフェルヌスがベトリアの町を包囲したとき、ユダヤの女性ユディトが將軍のもとを訪れる。美しいユダヤ女性に誘惑されたホロフェルヌスは、油断して酔いつぶれたところをユディトによって首をはねられる。意に反してナチ・ドイツの協力者になっているムラヴィヨフやスターシャにとって、敵を油断させるユディトの物語はある種のロールモデルになりうるものだが、ディルレヴァンガーの倒錯的な嗜好によって演出された芝居を演じさせられているにすぎない。そもそもコーヒーカップを盆にのせて運ぶスターシャの姿は、ホロフェルヌスの首を盆にのせるユディトに意図的に重ねられている。祖国への裏切りによって共同体からの疎外感に悩むムラヴィヨフにラスコーリニコフのような「復活」はありえないし、ユダヤ人であるスターシャの父親のラザロが地下室から解放されることもない。『懲罰隊』における聖書の朗読のモチーフは、『罪と罰』における復活のテーマを逆転させた絶望的なパロディだと考えられる。

## 5. ナイフと斧

規範の踏み越えと共同体からの疎外、人間の生命を秤にかける「算術」、ラザロの復活など、『懲罰隊』におけるムラヴィヨフの物語はあきらかに『罪と罰』を意識して構築されている。しかし、作中で実際にドストエフスキーの名前が引用されるのは一か所のみである。ヨハネの福音書や『ユディト記』が朗読されるディルレヴァンガーの晩餐会の席で、ツィンマーマンは自分が傾倒するニーチェをドストエフスキーと比較している。「絹布を捨てなさい。ナイフの喜びを感じるのです。あなたがたのドストエフスキーの作品では、殺人者が剃刀を絹の切れ端でくるんでいます。恥さらしな布切れでだれを救えたというのでしょうか。ただの偽善です。キリスト教的な。ブルジョア的な。マルクス主義的な」(Адамович, 1983a, p. 138)。ただし、ナチ・ドイツの将校が念頭においているのは『罪と罰』ではなく、『白痴』の一節だ。ロゴージンにいつか殺される予感に捉われたナスターシャは、彼の家のどこかに「絹で包まれた剃刀」が隠してあるにちがいないと想像している(第3部10章)。ツィンマーマンはナイフの刃を包む絹布をキリスト教的な偽善とみなして、むきだしの暴力である「ナイフの喜び」を感受するよう唆す。

『懲罰隊』には「ナイフの喜び、あるいはヒュペルボレイオスたちの伝記」という副題がついており、エピグラフにはニーチェの『反キリスト者』の第7章の一節が引かれている。「現代の不健康な近代性のただなかにおいて、キリスト教的同情にもまして不健康なものは何ひとつとしてない。ここで医者であるということ、ここで仮借しないということ、ここでメスをふるうということ—これこそ私たちのなすべきことであり、これこそ私たち流儀の人間愛であり、このことで私たちこそ哲学者なのである。私たち極北の民(ヒュペルボレイオス)こそ！」(ニーチェ, p. 172)<sup>15</sup>。「メス」はドイツ語原文では das Messer で、ナイフとも剃刀とも訳せる単語であり、アダモヴィチが引用しているロシア語訳では「ナイフ нож」となっている。ツィンマーマンが主張する「ナイフの喜び」は『反キリスト者』から借用したもののだろう。もちろん『白痴』のナイフは彼が考えるほど単純な道具立てではなく、むしろ殺意と情愛が併存するアンビヴァレントな心理を映し出しているはずなのだが、頭でっかちな親衛隊将校の理解が及ぶところではない。ニーチェのナイフに対比されるべきなのは、テキストには直接引用されていないラスコーニコフの斧なのである。ドストエフスキーがニーチェに与えた影響、あるいはニーチェの思想とナチズムとの因果関係は別個に論じるべき課題だが、親衛隊将

校のツインマーマンがニーチェの通俗的な解釈を用いてナチズムの暴力を肯定する姿は、祖国の裏切者となってしまったムラヴィヨフが『罪と罰』の主人公の理屈を借りて自己正当化する身振りを、合わせ鏡のように照らし出しているのは確かだ。

## おわりに

アダモヴィチは戦争中に好んで読んだ作家として、トルストイとドストエフスキーの名前を挙げている。トルストイの『戦争と平和』で描かれるナポレオン軍との戦争が、同時代の戦況と重ね合わせて読まれたのは間違いがない。しかしアダモヴィチにとってトルストイの作品は、戦争前の幸福な家庭生活の記憶やイメージとむしろ結びついているという。それに対してドストエフスキーの小説は戦争を描いているわけではないにも関わらず、その読書体験は常に戦争を想起させるものだった（Адамович, 1983b, p. 363）。

『炎の村から来た私』では残酷な戦争犯罪で子供を殺された親の無念の悲嘆が、『カラマーゾフの兄弟』のヨブ記の「新しい子供」をめぐるゾシマ長老の思索や、罪のない子供の迫害に憤るイヴァンの反逆に重ね合わされる。『懲罰隊』は極限状況に置かれた戦争捕虜がドイツ軍の協力者となり、民間人の虐殺に手を染めていく過程が、『罪と罰』におけるラスコーリニコフの殺人の論理を暗示させる。人間の生命の価値を選別する「算術」による自己正当化は、ニーチェ風の超人思想を経由することによって、ナチズムの暴力にも接続される。ナイフも斧も文学のテキストも、用いる人間の意図や解釈によって、作者が必ずしも予想しなかったような意味を与えられる。現代世界を生きる人々やそこで起きる出来事ともそれは無関係ではありえない。プーチンのロシアの戦争に心から賛同するであろうドストエフスキーも、ウクライナの民間人が無残に殺される場面に悲しみと憤りを示すはずのドストエフスキーも、どちらの解釈も私たちの想像力の中に位置を占めている。

## 【参考文献】

- Richard Breitman (1990), "Hitler and Genghis Khan," *Journal of Contemporary History*, Volume 25, Issue 2/3, pp. 337-351.  
Tim Brinkhof (2022), *What classic Russian literature can tell us about Putin's war on Ukraine*. (Big



- Think, March 8). <https://bigthink.com/the-past/russia-literature-ukraine-putin/>
- Alexander Dmitriev (2021), «Наш Достоевский»: присвоение как саморазрушение. *Revue des études slaves*, XCII-3-4, pp.487-505.
- Ani Kokobobo (2022), *How should Dostoevsky and Tolstoy be read during Russia's War against Ukraine*. (The Conversation, April 6). <https://theconversation.com/how-should-dostoevsky-and-tolstoy-be-read-during-russias-war-against-ukraine-179932>.
- アレーシ・アダモヴィチ、ダニール・グラニン (1986) 『封鎖・飢餓・人間：1941-1944年のレーニングラード』新時代社。
- アレーシ・アダモヴィチ (1990) 「人類の悲劇としてのチェルノブイリ」『世界』7月号、214-220頁。
- 越野剛 (2003) 「核時代の文学：アレーシ・アダモヴィチと大江健三郎」『スラウ学論叢』第6号、88-96頁。
- 越野剛 (2014) 「ハティン虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶」『地域研究』Vol.14-2、75-91頁。
- 越野剛 (2019) 「ロシア・ベラルーシの戦争映画における敵のイメージ—アレーシ・アダモヴィチ原作の映画を中心に」越野剛・高山陽子編『社会主義文化における紅い戦争のメモリスケープ—旧ソ連・東欧・中国・ベトナム』北海道大学出版会、23-44頁。
- ジョスリン・ゴドウィン (1995) 『北極の神秘主義：極地の神話・科学・象徴性、ナチズムをめぐって』工作舎。
- ティモシー・スナイダー (2015) 『ブラッドランド ヒトラーとスターリン大虐殺の真実』筑摩書房。
- フリードリッヒ・ニーチェ (1994) 「反キリスト者」『偶像の黄昏 反キリスト者ニーチェ全集 14』原佑訳、筑摩書房、161-279頁。
- Адамовіч А. Брыль Я. Калеснік У. (1975) Я з вогненнай вёскі... Мінск: Мастацкая літаратура.
- Карякин Ю. Ф. (1967) Правда посюстороннего мира (К столетию романа Ф. Достоевского «Преступление и наказание») // Вопросы философии, № 9. С. 147-158.
- \* タイトルの“посюстороннего мира”は辞書にはない語句だが、原文のまま引用した。
- Адамович А. М. (1982) Кузьма Чорный. Уроки творчества. // Собрание сочинений в 4 томах. Т.2., Минск: Мастацкая літаратура, С. 161-302.
- Адамович А. М. (1983а) Каратели (Радость ножа, или Жизнеописания гипербореев) // Собрание сочинений в 4 томах. Т.4., Минск: Мастацкая літаратура, С. 3-323.
- Адамович А. М. (1983b) Достоевский после Достоевского. // Собрание сочинений в 4 томах. Т.4., Минск: Мастацкая літаратура, С. 352-371.
- Шапран С. (2002) 11-я заповедь Алеся Адамовича. // Белорусская деловая газета. Для служебного пользования. № 7.

## 【註】

- 1 例えば Brinkhof (2022) や Kokobobo (2022) などのネット上の論考を参照。きわめて残念なことに、ロシアでは現行の戦争を正当化する論拠として、ウクライナでは



- 戦争を美化するロシア文学の悪例として、ドストエフスキーが引用される傾向が見られる。
- 2 クリモフ監督の映画に先駆けて、ボリス・ルツェンコの演出による演劇『ハティニへの帰還 *Возвращение в Хатынь*』(1977年初演)、これを映画化したユーリイ・ハシシェヴァツキー監督の『ハティニへの帰還』(1984年)がある。いずれも脚本にはアダモヴィチが関わっている。
  - 3 邦訳は、アダーモビチ他(1986)がある。
  - 4 アダモヴィチと作品の映画化については越野(2019)を参照。
  - 5 *Адамович. Достоевский после Достоевского*. С. 367-368.
  - 6 ドストエフスキーの翻訳は筆者による。原文は30巻本全集(1972-1990年)を用い、各種の日本語訳を適宜参照した。
  - 7 『ハティニ物語』については越野(2014)を参照。
  - 8 証言者のインタビューはベラルーシ語で行われており、本書の執筆言語もベラルーシ語である。ロシア語訳は1977年に刊行されている。本論文では地名や人名は基本的にロシア語表記によるが、同書からの引用はベラルーシ語表記を基にしている。
  - 9 アダモヴィチによるチョールヌイ論も参照(Адамович, 1982)。
  - 10 初出は1981年だが、スターリンをヒトラーと対比させて描いた「代役 *Дублер*」の章は検閲によって削除され、1988年まで刊行されなかった。
  - 11 スナイダー(2015、上巻、278-294頁)。ソ連軍捕虜のうち310万人が死亡した。カニバリズムの事例についても多数報告されている。ムラヴィヨフの場合と同じように、捕虜の中から100万人近いコラボレーターが選ばれて、ホロコーストなどのナチ・ドイツの戦争犯罪に協力した。
  - 12 『カラマーゾフの兄弟』でも、神や不死への信仰の欠如はカニバリズムに至るという考えが繰り返されている。
  - 13 *Michaek Prawdin* (1894-1970年)は主にドイツ語で執筆した。『チングスハン、アジアの嵐 *Tschingis Chan, der Sturm aus Asien*』(1934年)とその続編『チングスハンの遺産 *Das Erbe Tschingis Chan*』(1935年)が成功して、1938年には『チングスハンとその遺産 *Tschingis Chan und seine Erbe*』として1冊にまとめられたものが出版されている(Breitman, 1990, p. 339)。
  - 14 プ라우ディンの著作には、動物を生贄にする儀式を共同で行わせることで、チングスハンが軍団の結合力を高めたという一節がある。ヒトラーやヒムラーはそこから示唆を得て、戦争犯罪の共犯者とする事で兵士たちを決して裏切らない「血の紐帯」で結びつけることを考えていたという。『懲罰隊』にも、ディルレヴァンガーが非ドイツ人のコラボレーターに民間人の殺害という「儀礼」を強制する場面がある。このモチーフは『悪霊』のシャートフ殺しを想起させるが、プラウディンが後にモデルとなる事件を起こした革命家ネチャーエフに関する著書『モスクワに沈黙させられた男 *Netschajew - von Moskau verschwiegen*』(1961年)を出しているのは示唆的である(Breitman, 1990, p. 347)。
  - 15 ヒュベルボレイオスは極北の地に住むと想像された人々で、ナチ・ドイツのプロパガンダではしばしばアリア民族と同一視された。ゴドウィン(1995)を参照。